

どんづまり

宮本百合子

青空文庫

荒漠たる原野——殊に白雪におおわれて無声の呪われた様な高原に次第次第に迫つて来る夜はまことに恐ろしいほど厳然とした態度をもつて居る。

灰色と白色との合するところに細く立木が並んで居るほか植物は影さえもなく町に通わなければ「生」を保つて行かれない弱い力の人間どもがふみつけた道が世の中を思わせる様に曲りくねり細く太くずーつと見通せるもより遠くまでつづいて居る。

やせがまんをしながら博奕にまけて文なしになつた独りものの男は笑いながらたどつた。

パクパクになつた靴にしみ通る雪水の冷たさを感じながらも男

は笑いながら云った。

「ナ、今日は基本がねえからまけたんだ。あした一つぱたらきすりやあ又ひかったやつが己れさまの懷ん中へチャリーンと笑いながら舞いこむだ」

つぶやきながら、四辺を見まわした。

「いやにうすつくらりのくせにひかつてやがる。今の世の中はとかくひかったものがちやほやされるだよ。こんちく生！」
すべろうとした足をくいとめて男は斯う云った。

「なあにここで食えなくなったら又ほつつき廻ればらちがあくわな。」

「ここばかりに天とうさまが照りやあしめえー」

着物まではがれ様としたのを泣きついて許してもらった事、散々っぱらひやかされ嘲られてあげくは戸のそとへつきとばされた事、なじみの女に、

「又出なおしといで！」

とがなられた事等が悪い夢の様に頭に湧きあがつて来た。間借りをして居る婆にもかりがあり酒屋朋輩等^{なんか}へのかえさなければならぬはずのものは一寸男が今胸算よう出来ないほど少ない様な面をして居ていつのまにかかさんで居た。

「けつとばして逃げればいいじゃねえか」

反向的な声で男はうなつた。愚な只今までの誤り——名づけて経験と云うものでどうやら人殺しもせず泥棒もしないで生活して

居ることが出来るほど大まかな頭で逃げてからあとの事を考えた。

「自分の過去の歴史なんかは一寸もしらないものの中で根かぎり働く人にうまくとり入る。

朝日ののぼる様にグングンと出世して百や千の金は右から左に廻せる様になる——」

こんな風に男は歩みののろくなつたのも気づかずに考えつづけた。どんなに出世しどんなに立派になつて金がたまつてもそのどんづまりにはまっくろい着物を着て鎌の大きいのもつて人類の片っぱじからなぎたおして「生」とあらそつて居る骸骨の死の使者がガタガタと笑つて居た。

単純な頭で死と云う事を最も深く恐れて居る男はびっくりして

ひつかえた。

「何出世の出来ねえのは御やたちが生み様が悪れえんだ。ただ食つてさえ居ればいいのよ」

そう思つて殺されないだけの悪い事をして牢に入れば三度の飯はそんなに苦勞しないでも得られる。

「それがいつちええや、限らあ」

それまでになる道順を考え又それからあとの事までも思いめぐらして見た。

どんづまりにつきあたるところはやつぱりさつきと同じおそろしく物凄くそうして動かすことの出来ない悲しいたましい事であつた。

男は又あともどりをした。

そうして出なおした。

「うんと遊びぬいて——」

そのつきあたりも同様であつた。

「うんとなまけて——」

「死」がわらつて居る、

「そこいら中ほつつきあるいて——」

動かし得ないものにつきあつた。

「どうすりやあいんだ！」

信仰もなく自信もなく抱ふなどの有ろうはずもない男は通りこしてしまふ事の出来ない関所の前につきあたるとあとじさりをも

又つきやぶる事も出来ないでただなす事と云えば動かない「死」を声のかれるまでののしつてそのあげくは普通より以上にものすごくむごく死の手にとりあつかわれなければならぬ運命をもつて居た。

「フん、はばかなながら己様が今死んでなるもんかい。

女房もなくてさ！ 金もなくてさ！

あかんべーだよ」

雪のかたまりを男はけとばした。

「いくら死なそうたつて病氣にはならねえし、あいにく竹庵どのにはナ、これでも生れてから一度だつて御やつけえになった事はねえんだ！」

目には見えないでもすさまじい音をたてて頭の上で鎌をふりまわして居る黒い影のあるのを感じた男ははかなげにこう云いながら立ちどまってぐるつとあたりを見廻した。

うす黒い乳つくびの様な形のは男の囲りに無数に□つて来た。

前にだらりつとさげた布をあげると目玉のない鼻のないものが出てガタガタガタと笑ってはひしひと男にせまって来た。

その呪われたものの様な影の次にはまつしろな雪がキラキラ闇の中に光って居る。

あくんで居る男の足はいてついた様になって頭に血がドカドカとのぼって舞った。

のぼりつめて行きどこのない血はその小っぱけなろくでもない頭の中をあばれまわった。

「こんちく生！」

おどり上つて男が叫ぶと一緒に頭の上に何かが落ちかかつて来るのを感じた。

それからあとは男は何にもしらなかった。

夢中の様な形をして道のない雪をけたてて走りさる男の人間らしい形は段々小さくなつてたつた一つの黒点になつてころがつて行つた。

最後に「こんちく生！」とどなった口をあいたまんま頭を石の

間にはさんで男がつめたくなつて居たのは翌朝でうえた鳥は群れて丸くとんで居た。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

1986（昭和61）年3月20日第5刷

初出：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

どんづまり

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>